

イタリアのジャズ専門誌「ムジカ・ジャズ」(Musica Jazz)で、2006年度の《年間最優秀アーティスト》《年間最優秀アルバム》を獲得したステファノ・ボラーニ。現在、34歳。今やイタリア・ジャズ界を代表するピアニストに飛翔したボラーニのヴィーナスレコード第5弾にあたるピアノ・トリオ作の登場である。ボラーニのヴィーナスレコード第1作『ヴォラーレ』(2002年)はイタリアの名曲集。第2作『黒と褐色の幻想』(2002年)はジャズ・スタンダードを中心に収録。続く、第3作『愛の語らい』(2003年)はアントニオ・カルロス・ジョビン作品集。その次の第4作『けれど恋は』(2004年)は再びイタリア名曲集で、ボラーニはボーカルにもチャレンジした。ヴィーナス第1作が日本デビュー作だ。以上の4枚とも、録音メンバーはボラーニのレギュラー・トリオで、ベースはアレス・タボラッチ、ドラムはウォルター・パオリ。そして、早いもので約2年半ぶりのヴィーナスレコードへのレコーディングとなった最新作が、この『恋の気分で』である。

今回も不動のレギュラー・トリオによる録音だ。選曲はアメリカン・スタンダード集。興味深いのは「チーク・トゥ・チーク」「プッティン・オン・ザ・リッツ」などダンス・ナンバーがメインになっているところであり、ほかにもダンサブルなナンバーが並ぶ。アルバム・タイトル曲のジミー・マクヒュー作「恋の気分で」をはじめ、全体的にスイングーでダンス向きの名曲が揃っている。こうしたダンサブルなナンバーを取りあげながらも、ボラーニは自由で創造的なスピリットあふれる独自のトリオ・ミュージックを展開しており、ボラーニ・トリオが本領を發揮したアルバムといえよう。

ボラーニはクリエイティブで多才なピアニストだ。レギュラー・トリオをはじめ、“イ・ヴィジョナリ”という自己のクインテット、ソロ・ピアノ、オーケストラとの共演、イタリア・ジャズ界の巨匠エンリコ・ラバとのコラボレーションなどのプロジェクトで活躍している。ヴィーナスレコードの諸作でもわかるとおり、選曲の範囲も広い。初録音は1992年で、それ以来リーダー/サイドマンともに録音も数多い。昨年は前述のステファノ・ボラーニ&イ・ヴィジョナリによる『ヴィジョンズ』(レーベルはフランスのLabel Bleu)、ソロ・ピアノ作品『ピアノ・ソロ』(レーベルはドイツのECM)の2枚が日本でモリリリースされた。冒頭にふれた伊ジャズ誌の《年間最優秀アルバム》は『ピアノ・ソロ』で受賞した。そのソロ・アルバムはイタリアではポップス・チャートにランクインする程の大変な人気ぶりで、それをきっかけにテレビの人気番組にも何度か出演したそうだ。

ボラーニは1972年12月5日、ミラノ生まれ。歌手になることを夢に見ながら、6歳からピアノを始めた。自分の歌と演奏を録音して、ナポリの憧れのシンガー・ソングライター、レナート・カロソーネに送ったところ、「ブルースとジャズをたくさん聴きなさい」という返事をもたらう。それがきっかけでジャズにのめり込んだ。11歳でフィレンツェのルイジ・ケルビーニ音楽院に入学。早くも15歳でプロフェッショナルな活動を開始した。その後は幅広い活動をしながら、ジャズの世界的アーティストと多くの共演を経験した。1998年にムジカ・ジャズ誌の新人賞、2000年にイタリアのジャンゴ賞、2003年に日本のスイングジャーナル誌の新人賞を受賞するなど、すでに多くの栄誉を手になっている。また、ボラーニは文才にも恵まれており、昨年、小説「La sindrome di Brontolo」(不機嫌症候群)で作家デビューも果たしている。何でも村上春樹のファンで、英語版はすべて読んでいるそうだ。いやはや、大変な才人ぶりである。

こうした多才かつ多彩な活躍ぶりをみせるボラーニだが、その核となっているのが確固たる創造力であることはいうまでもない。今回のヴィーナスレコードの最新作がしめしているように、ボラーニのピアニズムは非常に堅実であり、自由自在なクリエイティビティにあふれている。彼の直感的なアドリブは自然

I'm In The Mood For Love 恋の気分で

Stefano Bollani Trio

ステファノ・ボラーニ・トリオ

- メイキン・ウービー Makin' Whoopee《W. Donaldson》(4：56)
- チーク・トゥ・チーク Cheek To Cheek《I. Berlin》(7：46)
- 恋の気分で I'm In The Mood For Love《J. McHugh》(3：36)
- プッティン・オン・ザ・リッツ Puttin' On The Ritz《I. Berlin》(3：38)
- いつの頃から How Long Has This Been Going On?《G. Gershwin》(7：00)
- マージー Margie《C. Conrad, B. Davis, J. R. Robinson》(7：02)
- ムーンライト・セレナーデ Moonlight Serenade《G. Miller》(5：52)
- ペイパー・ムーン It's Only A Paper Moon《H. Arlen》(5：37)
- ア・キス・トゥ・ビルド・ア・ドリーム・オン A Kiss To Build A Dream On《O. Hammerstein II, B. Kalmar, H. Ruby》(7：06)
- ハニー・サックル・ローズ Honeysuckle Rose《F. Waller》(5：15)
- バット・ノット・フォー・ミー But Not For Me《G. Gershwin》(3：24)

ステファノ・ボラーニ Stefano Bollani (piano)
アレス・タボラッツィ Ares Tavolazzi (bass)
ウォルター・パオリ Walter Paoli (drums)
録音：2006年8月 3, 4日 ハウス・レコーディング、ローマ

©️©️ 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.
*
Produced by Tetsuo Hara
Recorded at House Recording Studio in Rome on Augaust 3 & 4, 2006
Engineered by Emanuele Bossi, Assistant Engineered：Cristino Fini
Artist Management：M. G. M. Produzioni Musicali
Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover：🅄 Thomas Hoepker：Magnum Photos
Artist Photos：Paolo Soriani
Designed by Taz

な流れを生み出す。そこにジャズ・リスナーにとって快楽となる緊張感があるところも素晴らしい。ヴィーナスレコードから日本デビューして2007年で6年目。今後はイタリアを代表するジャズ・ピアニストとしてさらなる注目を集めることになりそうだ。

収録曲は以下のとおり。

メイキン・ウービー

近年でも映画で使われるなどポピュラーな人気のあるスタンダード・ソング。ボードビリアン、エディ・キャンター主演のミュージカル『ウービー』(1929年)から生まれた。Whoopeeは“バカ騒ぎ”の意味。余談だが女優のウービー・ゴールドバーグの名前のウービーは、プーブークッション(Whoopee Cushion)から取っている。ステファノ・ボラーニ・トリオの演奏は、原曲を題材としながら自由な解釈と展開をしめす。

チーク・トゥ・チーク

フレッド・アステア主演の映画『トップ・ハット』(1955年)のためにアービング・バーリンが作詞作曲した人気ダンス・ナンバー。同年、アステアの歌が大ヒットした。スローから始まり、テンポを速めるボラーニ・トリオの演奏は、ここでも自由自在でありながら創造性がある。

恋の気分で

ミュージカル映画『夜毎八時に』(1935年：Every Night at Eight) のためにドロシー・フィールズが作詞、ジミー・マクヒューが作曲。ルイ・アームストロング、ピリー・エクスタインらがヒットさせた。ボラーニ・トリオはレギュ

ラー・バンドだけあり一体感があり、流れるようなコンビネーションをみせる。

プッティン・オン・ザ・リッツ

同題の1930年の映画のためにアービング・バーリンが作詞作曲したダンス・ナンバー。ピング・クロスビー、フレッド・アステア主演の映画『ブルー・スカイ』(46年)に使われてリバイバル・ヒット。また、『ヤング・フラケンシュタイン』(76年)では、フランケンがこの曲でタップ・ダンスを踊った。“Put on the ritz”は「豪華な生活をする」「豪華に着飾る」などの意味。原曲のメロディー風のドラム・プレイから始まるボラーニのこのバージョンは、多彩なリズムが興味深い。ボラーニは迫真の名演をみせる。

いつの頃から

ヨーロッパの小国の王女が主人公のミュージカル『ロザリー』(1928年)で最初に使われた名曲。作曲はジョージ・ガーシュイン、作詞は兄のアイラ。知らない間に恋に落ちていたという心境を描いたバラードだ。ここでのボラーニ・トリオは、原曲のメロディーを少しずつ出しながらアドリブ主体の演奏をみせており、その絶妙な展開に惹き付けられてしまう。

マージー

1920年にコン・コンラッド、J.ラッセル・ロビンソンが作曲、ベニー・デイビスが作詞。ボードビリアンのエディ・キャンターらがヒットさせた。40年にこの曲をタイトルにした映画も製作された。ルイ・アームストロングなどがニューオーリンズ・ジャズ・スタイルの演奏を残しているが、ボラーニ・トリオのリズムはそれを現代風に解釈したものとイえるだろうか。

ムーンライト・セレナーデ

グレン・ミラー楽団のテーマ曲。作曲はトロンボーン奏者でバンド・リーダーのグレン・ミラー自身で、後からミシェル・パリッシュの歌詞が付けられた。出版は1939年。ボラーニのこの編曲と解釈もコンテンツボラリーな新しさがあり驚かされる。

ペイパー・ムーン

1932年にハロルド・アーレンが作曲、ピリー・ローズとエドガー・イップ・ハーバークが作詞した小粋なナンバー。紙に書いた月も信じれば本物になると歌われる。ヒット・バージョンの多い曲で、ライアンとテイタムのオニール父娘主演の映画『ペイパー・ムーン』(73年)では、初期のポール・ホワイトマン楽団のバージョンが使われた。この曲もボラーニの解釈の鮮やかさになうってしまう。まったくもって自由自在で自然発生的である。

ア・キス・トゥ・ビルド・ア・ドリーム

ルイ・アームストロングが1952年にヒットされたスタンダード・ソング。出版は1935年で、オスカー・ハマースタイン二世、バート・カルマー、ハリー・ルビーが共作。ボラーニ・トリオはベースをフィーチャーしながらバラード調で美しい歌心をみせる。

ハニー・サックル・ローズ

ジャズ・ピアニスト、作曲家のファッツ・ウォーラーの代表曲。恋人をハニー・サックル・ローズ(スイカズラの花)にたとえたラブリーなナンバー。ウォーラー自身をはじめ、ビッグ・バンドのヒット・バージョンが生まれた。原曲を素材とした創造的なトリオ・ミュージックを聴かせている。

バット・ノット・フォー・ミー

1930年にアイラとジョージのガーシュイン兄弟が映画「ガール・クレイジー」のために作詞、作曲したブルーなラブ・バラードの名品。ここでは、ステファノ・ボラーニのソロ・ピアノで演奏される。ボラーニの心の中がピアノに投影されたような稀にみる素晴らしいピアノ・ソロ。

(高井信成)